

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果			
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)			使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康故 害のおそれ		
ピホナゾール	・マイコス ボールク リーム ・マイコス ボール液	抗真菌作用 ・ピホナゾ ールは、皮膚糸 状菌 (Trichophyton 属、 Microsporum 属、 Epidermophyt on属)、酵母 類(Candida 属)及び黴風 菌(Malassezia furfur)に優れた 抗真菌作 用を有する。 作用機序 ピホナゾール は、真菌細胞 に対して二元 的な作用機 序を有する。 低濃度域で は細胞膜の 必須構成脂 質成分である エルゴステ ロールの合成 を阻害し、高 濃度域ではそ れに加えて細 胞膜のリン脂 質と特異的に 結合すること により膜の物 性を変化させ る。いずれの 効果も最終的 に細胞膜の 構造・機能を 障害し、その 結果、抗真菌 作用が発現さ れる。				マイコスボ ールク リーム 主として接触 皮膚炎 (0.53%)、局 所の刺激感 (0.17%)、発 赤・紅斑 (0.21%)、そう 痒(0.12%)等 0.1~5%未 満 (局所の刺激 感、皮膚炎、 発赤・紅斑、 そう痒) 0.1%未満 (びらん、鱗 屑、亀裂) マイコスボ ール液 主として局所 の刺激感 (0.87%)、接 触皮膚炎 (0.47%)、発 赤・紅斑 (0.27%)、亀 裂(0.23%)、 鱗屑 (0.13%)、そう 痒(0.11%)等 0.1~5%未 満 (局所の刺激 感、皮膚炎、 発赤・紅斑、 亀裂、鱗屑、 そう痒、びら ん) 0.1%未満 (乾燥)		本剤の成分過敏 症既往歴、著しい びらん面	・妊婦(3か月以内) 又は妊娠の可能性 のある婦人 ・亀裂、びらん面			・眼科用として角 膜、結膜には使 用しない。 ・著しいびらん面 には使用しない。 ・亀裂、びらん面 には注意して使 用する。	1日1回患部に塗布する。	下記の皮膚真菌 症の治療 白癬：足部白 癬、体部白癬、 股部白癬 カンジダ症：指 間炎、皮膚カン ジダ症 癬風
ピロールニト リン	医療用医薬 品となし													

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果		
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化				
			併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ					
抗ヒスタミン成分	塩酸ジフェンヒドラミン	外用はなし ジフェンヒド ラミンはあり ・ヒスタミン コーワ軟膏	アレルギーを 塗布または皮 肉注射したと きに起こる発 赤、膨疹、そ う痒などのア レルギー性皮 膚反応は、本 剤の1回塗布 により著明に 抑制される。					頻度不明(過 敏症)							炎症症状が 強い浸出性 の皮膚炎;適 切な外用剤 の使用でそ の炎症が軽 減後もかゆ みが残る場 合に使用す る。			使用部位:眼の まわりに使用し ない。		通常、症状により適量を1 日数回、患部に塗布または 塗擦する。	麻疹、湿疹、 小児ストロフル ス、皮膚そう痒 症、虫さされ
	マレイン酸ク ロルフェニラ ミン	外用薬とし てなし																			
鎮痒成分	クロタミトン	オイラックス	本剤は抗ヒスタ ミン作用を示 さないこと、 またヒトの皮 膚感覚のうち そう痒感を抑 制するが、他 の皮膚感覚 には影響を与 えないことな どから、抗ヒ スタミン剤、 局所麻酔剤と は作用機序を 異にすると思 えらる。一般 には、皮膚に 軽いしやく熱 感を与え、温 感に対するこ の刺激が賦合 的にそう痒感 を消失させる といわれている。				0.1~5%未満 (熱感、しやく 熱感、刺激症 状(ピリピリ 感、ひりひり 感等)、発赤、 発赤増強・紅 斑増悪、分泌 物増加、浸潤 傾向)	5%以上(過敏 症)		本剤に対して過 敏症の既往歴	・高齢者・妊婦 又は妊娠の可 能性のある婦 人への大量又 は長期にわた る広範囲の使 用、乳幼児・ 小児に対する 広範囲の使用				炎症症状が 強い浸出性 の皮膚炎;適 切な外用剤 の使用でそ の炎症が軽 減後もかゆ みが残る場 合に使用す る。			・眼あるいは眼 周囲及び粘膜 には使用しない。 ・塗布直後、軽 い熱感を生じ ることがある が、通常短時 間のうちに消 失する。	高齢者、妊婦 又は妊娠して いる可能性の ある婦人には 、大量・長期 にわたる広範 囲の使用は避 ける	通常、症状により適量を1 日数回患部に塗布又は塗 擦する。 ・高齢者・妊婦 又は妊娠の可 能性のある婦 人:大量かつ 広範囲の使用 は避ける。	湿疹、麻疹、 神経皮膚炎、 皮膚そう痒症、 小児ストロフル ス
収れん・ 保護成分	酸化亜鉛	酸化亜鉛	皮膚のたん 白質と結合し て被膜を形成 し、収れん、 消炎、保護並 びに緩和な防 腐作用を現す。 また、浸出液 の吸収及び分 泌抑制により、 創面又は潰瘍 面などを乾燥 させる。				5%以上または 頻度不明(発 疹、刺激感等)	5%以上または 頻度不明(過 敏症状)		濃度または広 範囲の熱傷(組 織修復の遅延)	患部が湿潤し ている場所(組 織修復の遅延)							使用部位:眼に は使用しない。 使用時:誤って 吸入しないよう 注意させる。		・外用散剤(散布剤)として 15~100% ・軟膏剤・液剤(懸濁剤・リ ニメント剤・ローション剤 等)として2~60% 上記濃度に調整し、いず れも症状に応じ1日1~数 回患部に適用する。	軽度の皮膚病 変の収れん・ 消炎・保護・緩 和な防腐

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				スイッチ化等に伴う使用環境の変化
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
局所麻酔成分	塩酸ジブカイン	ベルカミン注、表面麻酔類似と考え使用			振戦、痙攣等の中毒症状(頻度不明)	ショック(頻度不明)	頻度不明(眠気、不安、興奮、霧視、眩暈、悪心・嘔吐等)	頻度不明(過敏症)		本剤に対し過敏症の既往歴	本人又は両親、兄弟に気管支喘息、発疹、蕁麻疹等のアレルギー反応を起こしやすい体質。高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人。						使用に際し、目的濃度の水性注射液または水性液として使用する。ただし、年齢、麻酔領域、部位、組織、症状、体質により適宜増減する。 仙骨麻酔 0.05～0.1%注射液にエピネフリンを添加したものを、通常成人10～30mgを使用する。 伝達麻酔 (基準最高用量:1回40mg) 0.05～0.1%注射液にエピネフリンを添加したものを、通常成人3～40mgを使用する。 浸潤麻酔 (基準最高用量:1回40mg) 0.05～0.1%注射液にエピネフリンを添加したものを、通常成人1～40mgを使用する。 表面麻酔 ・耳鼻咽喉科領域の粘膜麻酔には、1～2%液にエピネフリンを添加したものを、通常成人には1～5滴を点眼する。 ・尿道粘膜麻酔には、0.1%液にエピネフリンを添加したものを、通常成人男子10～20mg、女子3～7mgを使用する。 ・膀胱粘膜麻酔には、0.025～0.05%液にエピネフリンを添加したものを、通常成人10～20mgを使用する。 ・局所鎮痛には、0.025～0.05%液を用い、適量を使用する。 歯科領域麻酔 0.1%注射液にエピネフリンを添加したものを、伝達麻酔・浸潤麻酔には塩酸ジブカインとして、通常成人1～2mgを使用する。	仙骨麻酔、伝達麻酔、浸潤麻酔、表面麻酔、歯科領域における伝達麻酔・浸潤麻酔

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)			使用方法(誤使用のおそれ)
			併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ	
局所 麻酔 成分	塩酸リドカ イン	キシロカイン 液「4%」	作用機序 塩酸リドカ インは、神経膜 のナトリウム チャネルをブ ロックし、神経 における活動 電位の伝導 を可逆的に抑 制し、知覚神 経及び運動 神経を遮断す る局所麻酔 薬である。 麻酔効果・作 用時間 塩酸リドカ インの表面・浸 潤・伝達麻酔 効果は、塩酸 プロカインよ りも強く、作用 持続時間は 塩酸プロカ インよりも長 い。		意識障害、振 戦、痙攣等の 中毒症状(頻 度不明)	ショック (頻度不明)	頻度不明 (脹気、不 安、興奮、霧 視、眩暈、悪 心・嘔吐等)	頻度不明 (過敏症)		本剤の成分又は ミド型局所麻酔薬 に対し過敏症の既 往歴	高齢者又は全身 状態が不良 ・心刺激伝導障害 (症状悪化) ・重症の肝機能障 害又は腎機能障 害(中毒症状の発 現) ・幼児(過量投与・ 中毒症状の発現) ・高齢者、小児、全 身状態が不良、肥 満者、呼吸器疾患 を有する患者で前 投薬や術中に投与 した鎮静薬、鎮痛 薬等を使用する際			高齢者：大量又 は長期にわたる 広範囲の使用 ・妊婦又は妊娠 の可能性のある 婦人：大量又は 長期にわたる広 範囲の使用 ・乳幼児・小児： 広範囲の部位へ の使用しない。 過量投与 嘔吐、症状 中枢神経系の症 状：初期症状と して不安、興奮、 多弁、口周囲の 知覚麻痺、舌の しびれ、ふらつ き、聴覚過敏、耳 鳴、視覚障害、 振戦等があらわ れる。症状が進 行すると意識消 失、全身痙攣が あらわれ、これら の症状に伴い低 酸素血症、高炭 酸ガス血症が生 じるおそれがあ る。より重篤な場 合には呼吸停止 を来すこともある。 心血管系の症 状：血圧低下、徐 脈、心筋収縮力 低下、心拍出量 低下、刺激伝導 系の抑制、心室 性頻脈及び心室 細動等の心室性 不整脈、循環虚 脱、心停止等が あらわれる。	塩酸リドカインとして、通常 成人では80～200mg(2～ 5mL)を使用する。 なお、年齢、麻酔領域、部 位、組織、体質により適宜 増減する。 (使用方法) 耳鼻咽喉科領域 鼻腔内、咽喉に刺激性薬 物を塗布する前処置、耳 管カテーテル挿入、下甲 介切除、鼻中隔矯正、扁桃 切除、咽喉頭鏡検査等 の場合本剤の適量(一時 に5mL(塩酸リドカインと して200mg)以内)を塗布又 は噴霧する。 泌尿器科領域 膀胱鏡検査、尿管カテ ーテル挿入、逆行性腎盂撮 影法、凝血除去、結石処 置、経尿道式尿道乳頭腫 切除等の場合4%液を倍量 に希釈し、その約10mL(塩 酸リドカインとして200mg) を尿道内に注入し、男子で は陰茎を箱搾りではさ み、女子には綿栓を施して 5～10分間、液を尿道内に 貯留させる。 気管支鏡検査 全身麻酔時の挿管には本 剤を倍量に希釈し、その適 量(10mL(塩酸リドカインと して200mg)以内)を噴霧す る。 幼児(特に3歳以下)：低用 量から投与を開始(麻酔効 果の把握が困難なため高 用量又は頻回投与とされや すい)	表面麻酔

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果		
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別 に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ化等に伴う使用環境の変化	
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				
殺菌・消毒成分	塩酸クロルヘキシジン	グルコン酸塩として5%ヒビテン液				ショック(0.1%未満)		0.1%未満(過敏症)		・クロルヘキシジン製剤過敏症の既往歴 ・脳、脊髄、耳(内耳、中耳、外耳)(聴神経及び中枢神経)に対して直接使用した場合は、難聴、神経障害を来すことがある。 ・腫、膀胱、口腔等の粘膜面(ショック症状の発現が報告されている。) ・産婦人科用(膣・外陰部の消毒等)、泌尿器科用(膀胱・外性器の消毒等)には使用しない。 ・眼	・薬物過敏症の既往歴 ・喘息等のアレルギー疾患の既往歴、家族歴				・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。 ・外用にのみ使用する。 ・眼に入らないように注意する。				本品は下記の濃度(グルコン酸クロルヘキシジンとして)に希釈し、水溶液又はエタノール溶液として使用する。 効能・効果 用法・用量 (使用例) ①手指・皮膚の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈) ②通常時:0.1%水溶液(30秒以上) 汚染時:0.5%水溶液(30秒以上) ③手術部位(手術野)の皮膚の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈) (0.5%エタノール溶液) ④皮膚の創傷部位の消毒 0.05%水溶液(本剤の100倍希釈) (0.05%水溶液) ⑤医療用具の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈) (通常時:0.1%水溶液(10~30分) 汚染時:0.5%水溶液(30分以上)) 緊急時:0.5%エタノール溶液(2分以上)) ⑥手術室・病室・家具・器具・物品等の消毒 0.05%水溶液(本剤の100倍希釈) (0.05%水溶液)	

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 添用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上 限があるもの	適量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
殺菌・消毒成分	塩化ベンザルコニウム	0.1w/v%デミトール水						頻度不明(過敏症)			粘膜、創傷面または炎症部位に長期間または広範囲に使用しないこと				<ul style="list-style-type: none"> 原液は皮膚・粘膜に付着及び眼に入らないように注意する(刺激性がある)。 炎症または易刺激性の部位(粘膜、陰股部等)への使用: 正常の部位への使用より低濃度とすることが望ましい。また、使用後は滅菌精製水で水洗する。 深い創傷または眼に使用する希釈水溶液は、調製後滅菌処理すること。 経口投与しないこと。洗眼には使用しないこと。 密封包装、ギブス包装、バッグに使用すると刺激症状があらわれることがあるので、使用しないことが望ましい。 	<ul style="list-style-type: none"> 粘膜、創傷面または炎症部位に長期間または広範囲に使用しないこと(全身吸収による筋脱力がある)。 	<p>効能・効果・用法・用量(塩化ベンザルコニウム濃度)</p> <ol style="list-style-type: none"> ①手指・皮膚の消毒: 通常石けんで十分に洗浄し、水で石けん分を十分に洗い落とし、塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液に浸して洗い、滅菌ガーゼあるいは布片で清拭する。術前の手洗の場合には、5~10分間ブラッシングする。 ②手術部位(手術野)の皮膚の消毒: 手術前局所皮膚面を塩化ベンザルコニウム0.1%溶液で約5分間洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.2%溶液を塗布する。 ③手術部位(手術野)の粘膜の消毒: 塩化ベンザルコニウム0.01~0.025%溶液を用いる。 ④感染皮膚面の消毒: 塩化ベンザルコニウム0.01%溶液を用いる。 ⑤医療用具の消毒: 塩化ベンザルコニウム0.1%溶液に10分間浸漬するか、または密閉に消毒する際は、器具を予め2%炭酸ナトリウム水溶液で洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.1%溶液中で15分間煮沸する。 ⑥手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒: 塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液を布片で塗布・清拭するか、または噴霧する。 ⑦膿洗浄: 塩化ベンザルコニウム0.02~0.05%溶液を用いる。 ⑧結膜囊の洗浄・消毒: 塩化ベンザルコニウム0.01~0.05%溶液を用いる。 <p>・炎症または易刺激性の部位(粘膜、陰股部等)への使用: 正常の部位への使用より低濃度とすることが望ましい</p>	

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づき 適応禁忌		症状の悪化 につながるおそれ		使用方法(誤使用のおそれ)		スイッチ化等に伴う使用環境の変化			
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
角質溶解成分	サリチル酸	サリチル酸	角質溶解作用。細胞間基質を溶解し鱗屑の剥離を促進して角質増殖皮膚を軟化させる作用がある。防腐作用。微生物(白せん菌類など)に対して抗菌性があり、その防腐力、石炭酸に匹敵する。				頻度不明(発赤、紅斑等の症状、長期・大量使用で内服・注射等全身の投与の場合と同様な副作用)	頻度不明(過敏症)		本剤に対し過敏症の既往歴	妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、未熟児、新生児、乳児、小児	患部が化膿しているなど。潤滑、び爛が著しい場合、あらかじめ適切な処置を行った後使用。		広範囲の病巣に使用した場合：副作用があらわれやすいので注意して使用。眼下部には使用しないこと。	長期・大量使用で内服、注射の場合と同様な副作用発現のおそれ。長期間使用しても症状の改善が認められない場合、改めて診断し適切な治療を行うことが望ましい。		1 通常サリチル酸として、50%の絆創膏を用い、2～5日ごとに取りかえる。 2 2次の濃度の軟膏剤又は液剤とし、1日1～2回塗布または散布する。小児：サリチル酸として0.1～3%、成人：サリチル酸として2～10%	1 痒癢・瞼眼・眼瞼腫の角質剥離。 2 乾癬、白癬(頭部発疹性白癬、小水疱性斑状白癬、頑癬)、癬風、紅色胎毒、角化症、尋常性魚鱗癬、先天性魚鱗癬、毛孔性苔癬、先天性手掌足底角化症(腫)、ダリエー病、遠山連團状皰癬疹)、湿疹(角化を伴う)、口囲皮膚炎、掌跖皰癬疹、ヘブラ皰癬疹、アトピー性皮膚炎、ざ瘡、せつ、皸癬症、多汗症、その他角化性の皮膚疾患
消炎成分	グリチルレチン酸	デルマクラリン軟膏	グリチルレチン酸は急性炎症に対する抗炎症作用(浮腫抑制-ラット、肉芽腫抑制-ラット、抗紅斑-モルモット)を有する。抗炎症作用は主成分であるグリチルレチン酸の化学構造がハイドロコチソンの化学構造に類似しているところによると推定される。					5%以上又は頻度不明(過敏症)						眼科用として使用しない			通常、症状により適量を1日数回患部に塗布または塗擦する。	湿疹、皮膚そう痒症、神経皮膚炎